

がんばる

Chubu

観光地域づくり編

昇龍道のモデルコース周辺で展開される

「観光地域づくり」を紹介する特集。

今回のエリアは長野県の飯山市と北陸新幹線飯山駅を中心に周辺9市町村で構成される信越自然郷。

新幹線駅開業効果を最大限に生かし、広域で誘客力を高める取り組みを紹介する。

新幹線駅開業でチャンス到来！ あらゆる手法で誘客力を強化していく



スキー依存からの脱却を目指し、グリーンツーリズムを推進

豪雪を生かした観光振興のはじまり

唱歌「ふるさと」や「朧月夜」にも歌われたのどかな風景が今に残る飯山市。長野県の最北端に位置し日本有数の豪雪地帯として知られる。かつて戦国時代、上杉謙信が川中島の戦いにおいて武田軍に対する戦略拠点として改修した飯山城を核に発展し、江戸時代には城下町として、さらには千曲川の舟運の起点として繁栄していった。しかし、明治を迎えると、鉄道輸送の進展に伴い舟運は衰退。その後、基幹産業の農業で生計を立てる多くの農家は、農閑期に出稼ぎを余儀なくされていた。

そのような中、昭和30年代よりスキーブームが巻き起こり、飯山でも戸狩温泉スキー場、斑尾高原スキー場をはじめ6カ所のスキー場が開発された。リフト会社、スキー学校、食堂などで雇用の場が生まれ、そして何より大きかったのは出稼ぎを強いられていた多くの農家が冬の副業として民宿経営をはじめたことだった。ホテル、旅館、ペンションもあわせると最盛期には約250軒の宿泊施設が林立し、農家民宿はその内の約150軒を占めるに至った。

スキー客の減少で訪れた転機

スキーブームは昭和後期から平成初期にかけて全盛期を迎え、飯山にも1シーズンで150万人近くのスキー客が訪れた。しかし、バブル経済の崩壊とともにブームは去り、現在ではピーク時の1/5くらいまで減少している。宿泊施設存続のため、観光地としての生き残りをかけ、飯山では全国に先駆けてグリーンツーリズムや教育旅行の誘致など、グリーン期(春～秋)の誘客に力を注ぎ、通年型観光へとシフトしていった。

グリーン期への誘客に真っ先に動き出したのは、戸狩温泉スキー場の農家民宿だった。関東方面の小・中学校へ営業に赴き、農業体験など教育旅行の誘致を開始した。さらに、農家民宿の取り組みに呼応するように、四季を通じて様々なアウトドアや農山村体験を楽しめるグリーンツーリズムの拠点施設として、市内北端に位置する鍋倉山の麓に広がる高原に、飯山



「森林セラピー®基地」にも認定されている森の家でヨガ体験

市が「なべくら高原・森の家」を設置し、1997年に飯山市振興公社が市から運営を受託して開業した。

よそ者と地元住民が協力し飯山の魅力を引き出す

森の家では、支配人をはじめ中核を担うスタッフに県外出身者を起用した。地元住民には当たり前で気づきにくい魅力や楽しみ方を、外からの目を通して考えるのが狙いだった。しかし、その本質は外部の人にはわからない。そこでスタッフの中には周辺集落で地元住民とともに生活し、彼らと協力しながらより飯山らしい体験プログラムづくりを模索している人もいる。プログラムの提供は、そば打ちやキノコ狩りが得意な人、語り部や登山ガイドができる人など、約200名の地元の名人たちに市民インストラクターとして登録してもらい実施している。

今年21年目を迎えた森の家では、宿泊も体験も約6割がリピーターだ。支配人の高野賢一さんは、「上高地や軽井沢など知名度の高い観光地と違い、『なべくら高原』



スノーシューは雪山初心者でも気軽に遊べるスポーツとして注目を集めていると聞いても誰も知らない。だからリピートしてもらえるプログラムをつくり続けていくのが大きな課題だ」と言う。冬に人気のスノーシュー体験一つをとってみても、「はじめの一步スノーシュー」「スノーシューでカップラーメンを食べに行こう」「満月ナイトハイキング」など、楽しむポイント、コース、難易度を変えてバリエーションを持たせることでリピーターの心を掴んでいる。

森の家では宿泊や体験の他に、いいやまブナの森倶楽部(2000年～)、里山再生活動(2002年～)、NPO法人信越トレイルクラブ(2003年～)などの公益的な事業の事務局も担っており、自然環境の保全や観光地域づくりを支えている。

北陸新幹線飯山駅の開業効果を生かす観光地経営がはじまる

飯山の日常が体験できる“飯山旅々。”の誕生

様々な体験プログラムの開発でファンづくりに取り組む一方で、2015年の北陸新幹線飯山駅開業を控えた飯山市では、市内広域で観光誘客力を強化するため、飯山市観光協会と飯山市振興公社を統合し、「信州いいやま観光局」を2010年に設立。それに伴い、森の家の運営も観光局に移った。

観光局では、農業や地場産業との連携で地域を経営



観光局は森の家の他に、高橋まゆみ人形館(写真上)、いいやま湯滝温泉(写真下)、道の駅の運営も市から受託し、収益を上げている

していくことを重視し、自らの旅行商品を企画販売する観光事業「飯山旅々。」を2011年に立ち上げた。観光局のスタッフと市内6エリア(斑尾高原、信濃平、戸狩温泉、なべくら高原、北竜湖、市街地)の代表者がエリアごとのプログラムを企画し、ウェブサイトで販売。飯山の自然・文化・

食などを資源とし、地元住民の人情に触れられ、他では体験できないディープな旅を常時60ほど提供している。

参加者は6割強が女性で、森の家と同様リピーターが多い。2011年度の195名から2016年度の639名と地道ながら着実に数字は伸びてきている。営業企画課課長補佐(兼)統括係長の柴田さほりさんは、「わら細工のインストラクターを担当するおばあちゃんをはじめ、飯山の暮らしの中で身についた技が役立つことを知った多くの地元の人たちが、生き生きとしてきている。観光客を呼ぶことだけでなく、受入側が地元で誇りを持つような結果を出すことも私たちの使命だ」と仕事のやりがいを語る。



地元住民の協力があって成り立つ「飯山旅々。」のプログラム

9市町村が連携しエリアのブランド化を目指す

北陸新幹線飯山駅の開業を迎えるに当たり、広域連携による観光振興も始動した。飯山駅を起点とする20km圏域の9市町村が連携し、このエリアを一つのブランドとして確立しようというものだ。

信越自然郷の9市町村



2012年、飯山市長を会長に63団体が構成される「信越9市町村広域観光連携会議」が設立。山岳、森林、湖、雪などの自然に育まれた同じ文化を持つエリアとして

「信越自然郷」と命名し、世界中から観光客を呼べる国際的なリゾートとして売り出す取り組みがスタートした。

従来の「物見遊山型」ではなく、ゆっくり長期滞在することで心身の保養や活性化が得られる「保養・獲得型」の観光エリアとしての浸透を図るべく、アウトドア・リラクゼーション・食文化を信越自然郷の3つの価値として定めた。飯山市に広域観光推進室が設置され、2016年には、観光局の広域観光部門「飯山駅観光交流センター」が地域連携DMO (Destination Management / Marketing Organization) として推進役を担うこととなった。

通年型の観光戦略を舵取り役として推進



営業企画課の柴田さん(左)と飯山駅観光交流センターの大西さん(右)
信越自然郷アクティビティセンターの入口にて

DMOとしての大きな事業は、飯山駅の正面玄関口に設置された「信越自然郷飯山観光案内所」と「信越自然郷アクティビティセンター」の運営だ。観光案内所では旅のワンストップ窓口サービスを実施し、アクティビティ

センターでは様々な事業者と連携したアクティビティプログラムを提供している。また、ビッグデータを活用したマーケティング調査や広域観光のための交通や情報インフラの整備など、多様な事業を手掛けている。

外国人を魅了する信越自然郷の人気スポット

北海道のニセコがオーストラリア人に人気のスキー場なのは有名だが、来訪者が増え過ぎたこともあり、新天地を求め、5、6年前から野沢温泉スキー場に押し寄せている。雪質の良さに加え、温泉街の景観や外湯めぐりといった日本文化も堪能できるのが人気の理由だ。今では外国人宿泊客のうち約6割がオーストラリア人で、ペンションやバーを経営する人も出てきている。また、台湾やシンガポールなどアジア圏からの来訪者も増えてきている。近くには外国人に人気の赤倉温泉スキー場やスノーモンキーで有名な地獄谷野猿公園もあり、今後、ますます外国人観光客の増加が期待できる。

信越自然郷は国内有数のスキー場が集積するエリアであり、スキー客が減少したと言ってもそこに頼る部分は大きい。さらに、新幹線駅開業効果で国内はもとより海外からもスキー客が増加するなど、冬期が圧倒的に強い。そこで、DMOはグリーン期の誘客増を目的とし、現在サイクルツーリズムの環境づくりに力を入れている。サイクリング人口はまだまだ少ないが、誰もが楽しみ、自然を身近に体感できるという点では、裾野は計り知れないほど広いアクティビティだ。DMOではモデルコースの開発、サイクルステーションの整備、サイクルバスの実証運行をはじめている。



美しい里山風景を肌で感じながら楽しめるサイクリング

広域連携への意識向上で 信越自然郷を人気リゾートエリアに

広域連携を推進していくには課題も多い。信越自然郷は野沢温泉や志賀高原といった名だたる観光地が備わるエリアでもある。それらの観光地には長年培ってきた独自のプロモーションのノウハウや顧客があり、ブランド力や高い誘客力を持っている。これらの観光地にとっては、広域連携をすることによるメリットが見えづらく、足並みを揃えることが難しいといった課題もある。

飯山駅観光交流センター副所長の大西宏志さんは、「今はまだ基盤整備をしている状況。目に見える成果を出し、それがエリアに対してどういうメリットを生み出するかをこれから示していかなければならない。サイクルツーリズムをはじめたばかりだが、『しまなみ海道』のようにサイクリストによる大きな経済効果が生み出されれば、広域連携の意義も見えてくるはず」と期待を語る。

現在、信越自然郷の観光入込客数は年間約1,000万人。車やツアーバスなど交通手段は様々だが、新幹線駅ができたことで大きなチャンスを得た。狭い飯山だけの範囲ではなく、広域連携だからこそ色々なルートや多様な資源を最大限に活用できる。信越自然郷の魅力を余すところなく発信し、通年型の国際的なリゾートとして人気の観光地となることを楽しみにしたい。

文:企画部 櫻井 景子
取材協力・写真提供:
(一社)信州いいやま観光局



“飯山旅々。”の人気プログラムを体験してみよう!

「飯山旅々。」では、飯山でしか体験できない個性的でバラエティに富んだ旅が満載。思いっきり体を動かして遊びたい人も、のんびりと癒しの旅を味わいたい人も、きっと満足できるはず。

プログラムの詳細・問い合わせ・予約に関しては、「飯山旅々。」のホームページ(<http://www.tabi-tabi.com/>)にアクセスしてください。

今すぐ予約を! 冬限定「かまくら」を体験できる人気プログラム!!

1 斑尾高原エリア

かまくらランチと スノーシューで湖上散歩!

飯山冬の風物詩「かまくら」でのランチとふかふかの雪の上を歩くスノーシューをセットで楽しめます。ランチは飯山のブランド豚「みゆきポーク」と飯山産の野菜がたっぷり入ったみそ仕立ての「のろし鍋」を堪能できます。

日数 1泊2日
旅行代金 17,800円



のろし鍋

2 信濃平エリア

北信州いいやま「のんびり 田舎のかまくら物語」の旅

地元のお父さん「かまくら応援隊」がつくる「かまくら」の中で、名物「のろし鍋」を囲みながら夕食が楽しめます。雪国ならではののんびりとしたひとときで、身も心もリフレッシュしませんか。

日数 1泊2日
旅行代金 10,700円(平日宿泊)
11,000円(土日祝宿泊)



グリーン期開催のプログラムも早めにチェックし計画を立てよう! (料金は昨年度の参考価格です)

3 戸狩温泉エリア

かあちゃんの 信州郷土食教室

～「いいやま」の食文化と料理のコツ～
飯山で祝い事があると必ず食べられる「笹ずし」と「いもなます」、信州を代表する郷土食の「おやき」。地元のお母さん指導のもと、野菜の収穫からはじまり、じっくりつくってたっぷり味わえるプログラムです。

日数 2泊3日
旅行代金 22,400円



笹ずし

4 なべくら高原周辺エリア

なべくら高原のコテージ 宿泊プラン

飯山市は森林浴によるリフレッシュ効果が実証された森林セラピー®基地。美しいブナの森が広がるなべくら高原で、ノルディックウォーキング、森林ヨガ、森林セラピーを体験してみませんか。宿泊は森に囲まれた独立型のコテージ。玄関を出れば森への歩道が続いています。

日数 1泊2日
旅行代金 19,600円

